

郷土ほんのり

第16号

平成7年 飯能市の大きな遺跡調査現場はここで

- | | |
|---------------|-----------|
| ① 笠縫土地区画整理地字内 | (大字笠縫・川寺) |
| ② 大日向遺跡 | (大字宮 沢) |
| ③ 横道下遺跡 | (大字唐 竹) |
| ④ 八王子遺跡 | (大字宮 沢) |
| ⑤ 粟屋遺跡 | (大字下加治) |
| ⑥ 落合上ノ台遺跡 | (大字落 合) |

文化財調査速報

飯能市教育委員

柳戸 信吾

昨年、市内で二つの文化財の大発見がありました。ここではその概要を報告したいと思います。

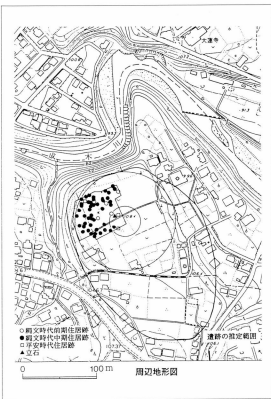
市内最大級の縄文集落

●はじめに

●はじめに
 落合上ノ台遺跡は成木川が入間川と合流する地点から九〇〇mほど上流の成木川右岸の河岸段丘上に位置します。遺跡の北側を流れる成木川との比高差は一八メートル急な崖となり、西には

小支谷が流れ、東端は段丘崖線で画された平坦面、集落を営むには絶好の立地条件を備えた場所です。

このあたりは市街化調整区域にあたるため今まで開発はほとんどありませんでしたが、このたび病院が建設されることとなりました。祖先の生活を知るための資料としての遺跡は本来そのままの状態でも未来に受け継ぐことが望ましいのですが、そこをどうしても開発しようとするときには壊される前に発掘調査をして記録を残さなくてはなりません。そのため、建物が建つ



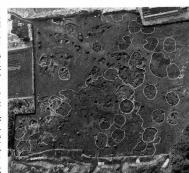
範囲の三、〇〇㎡を発掘調査し、庭や駐車場となる場所はそのまま保存することとしました。発掘調査は平成七年一月二〇日から平成八年三月二日にかけておこなわれ、その結果、市内でも最大級の縄文集落跡であることがわかってきました。

●調査の概要

発掘調査はまず、ローム層（赤土）や砂利層直上まで表土を重機で取り除くことから始めました。その後土の表面を丁寧にジョロで削り、土の黒い部分を探します。この黒い土は過去に掘りくぼめられた跡で、長い年月の間に腐植土が堆積したものです。住居跡や墓、貯蔵穴の跡はこうして見つけます。

しかし、今回の調査区の中央付近から北側三分の一にかけては、一面に黒く、多くの土器がそこに埋もれていました。はじめはこの部分に谷があつて土器などを捨てた跡かと思いましたが、掘り進むにつれ、土器の集中箇所や炉、埋嚢、貼り床等が見つかりました。これは住居跡の証拠です。つまり、この部分に確かに谷はあつたのですが、縄文時代にすでに埋まっております。そこに住居を築いたのです。

今回の調査では縄文時代中期（約五千年前）の住居跡が五七軒も見つかりました。そのほかには縄文時代前期（約六千年前）の住居跡五軒、集石土壇二五基



航空写真

土壇七九基、平安時代住居跡三軒が発見されました。

縄文時代中期の住居跡は調査区南東部に弧を描くように帯状に分布しています。この時期の集落は中央の広場を取り囲むように住居が環状に配置することが多いため、落合上ノ台遺跡も同様だとすると集落の規模は直径一三〇mほどとなり、今回はその北西部の四分の一を調査したことになります。四分の一で五七軒ですから単純に計算すると全体で二百軒近くの住居跡が埋もれていることとなります。

これほど大規模な集落跡は市内では例がありません。もともと住居跡は重なっているものも多いため、同時に二百軒もの住居が存在していたのではなく、長い年月（千年くらい）の間建て替えていった結果、残されたものでしょう。同時期にはせいぜい一五軒ほどだったのではないのでしょうか。ただその間、中央の広場は家を建てずにつつと意

識されていたようです。調査区南東部には高さ六〇cm幅四〇cmの巨大な自然石が立てられています。石の上には現在の地表面に達していましたが、周りからは特に変わった遺物は出土していませんが、この位置が集落の中央広場の西寄りにあたるため、信仰の対象物だった可能性もあります。縄文人がこの石に食料がたくさんおとれるように祈ったり、石のまわりにおまつりでもしたのでしょうか。他の遺跡ではあまり発見例がないようです。

●調査の成果と今後の課題

今回の調査で、落合上ノ台遺跡は中央に広場をも縄文時代中期の大規模な集落跡であることがわかりました。

今後は、当時の集落がどのような様子でそのまわりがどのような活動をしてきたか、といった集落景観を復元しなくてはなりません。また、市内には他に大規模な集落跡として加能里遺跡がありますが、これは同時期の集落との関係も気になります。さらに、縄文時代中期に続く後期以降の遺物はほとんど発見されませんでした。これは縄文時代後期以降この地に人が住んでいなかったことを示します。このような集落に違った場所をなぜ人々が去ってしまっただのか、興味深い問題です。これらには出

土品や発掘調査のデータを整理し、他の遺跡の例とも比較検討しながら解決していきたいと思えます。

小瀬戸・大河原から

発見された銅板経

●はじめに

昨年(平成七年)の九月末に市内の小瀬戸・大河原からあいついで銅板経が発見され、話題になりました。銅板経とは銅製の板にお経を記したもので、今までに全国でも七例しか報告例がなく非常に珍しいものです。しかも小瀬戸・大河原とも近世の宝篋印塔と呼ばれる石塔の塔心部から発見されたもので、このようなものは京都市大報恩寺、大分市大山寺の二例しかありません。

このような貴重なものが飯能市で二例も発見されたことの歴史的意義や評価は今後議論されるべきでしょうが、ここでは発見された銅板経の概要を紹介してみたいと思います。

●小瀬戸・野口家の銅板経

銅板経は野口氏宅裏の個人蔵地にある宝篋印塔(高さ一六三cm・享保七年(二七二年)銘)から発見されました。宝篋印塔の塔心部に直径一〇cmの筒状の穴が貫通しており、その中に青銅製の小仏像と共に納められて

いました。

銅板経は、縦二三・〇cm、横四・六cmの短冊型の銅板が三枚、小さなちようつがいで繋ぎ、折本形式にたたまれており、そこに宝篋印陀羅尼経が梵字で刻まれておいた。梵字に続き漢字でこのお経の功德が説かれ、最後に「享保七年壬寅歳九月吉日」という年号、そして施主の「野口忠左衛門」の名が刻まれています。

この野口忠左衛門という人は享保元年(一七一六年)に地元で観音堂(果道飯能名栗郷から中野谷津に入り、しばらく進んだ右側にあるお堂)を建てています。さらに妻の「奥野」は享保六年から八年間、漢字にして二千字以上にもなる観音経をほとんども毎日、平仮名で写経し、観音堂に奉納しています。信仰



小瀬戸・野口家の銅板経

心に篤い夫婦だったことがわかります。

●大河原・太子堂の銅板経

大河原の金蔵寺境外仏堂太子堂(八耳堂)にある宝篋印塔の基礎部が水の浸食作用で不安定になり、修理のため解体工事をしたところ塔心の中から銅板経が発見されました。この宝篋印塔は高さ三八〇cmと大形のもの、「中里善左衛門」と刻まれています。

銅板経は縦一八・四cm、横三〇・四cmの大きさのもので三枚あり、三枚を重ねて中央で折り、そこに金剛界五仏を墨書した五枚の紙片と大日如来の種子を漆書した銅板が挟まれていました。このほか舍利を焼土を包んだ銅板も一緒に納められていました。舍利は石質の直径三・五mmほどの小石で、釈迦のお骨の代わりです。

三枚の銅板経とも、宝篋印陀羅尼経が表裏に漆で書かれています。最初の二行に「一切如来身秘密全身舍利宝篋印陀羅尼」とお経の正式名が書かれ、梵字の宝篋印陀羅尼経が続き、最後には主旨や紀年、施主名が記されています。紀年は文化八年(一一八一年)九月、施主は「大河原村 金蔵寺 中里善左衛門」です。三枚とも野線が引かれそれに合わせて書かれています。一枚一枚筆跡が異なっています。

●宝篋印陀羅尼経と

宝篋印塔について

さて、銅板経に書かれていた「宝篋印陀羅尼経」とはどのようなお経なのでしょう。これは密教教典の部に属し、真言宗常用の「三陀羅尼」の一つで、それを塔心におけば塔は七宝に変わり、無量の威神力を増すとうたわれ、また、それを誦すれば、地獄の先祖は極楽に至り、百病・貧窮の者も救われるといわれる有り難いお経です。

これを納めた石造の塔が宝篋印塔で、その原型は天曆(一〇〇九(九五六年))以降中国大陸から日本に請来された「八万四千塔」とされています。初期にはお経や仏舍利を納めたものでしたが、中世以降はその性格が変わり、主に墓塔として建てられるようになりました。しかし、近世後



大河原・太子堂の銅板経

半になって宝篋印陀羅尼経の注釈書が出され、それが民間に普及すると再び教典や仏舍利を入れた宝篋印塔が盛んに造られるようになりました。

小瀬戸・大河原で銅板経が発見された宝篋印塔はちょうどこの頃のものでです。

●今後の課題

最初に紹介したように銅板経は全国的に見ても非常に珍しいものです。しかし、大河原・太子堂の銅板経が解体工事中に見えられたように今後類似が発見される可能性があります。また、宝篋印塔内から紙に書かれたお経や小塔が発見された例は県内でもいくつかあるため、これらの納入品とも比較しながら銅板経を納めた意義を考えなくてはなりません。

さらに、銅板経の入手経路、当時の社会情勢や信仰のあり方、施主の経歴などを調べていき、野口忠左衛門や中里善左衛門がどのような時代背景のもとで何を願って塔を造ったかを明らかにする必要があります。これが近世の人々の信仰がいかなるものであったかを知ることにもつながるのです。

このような検討を経て、単に「珍しいもの」としての銅板経から、「一歩進んで近世民衆の「こころを探る」銅板経へとその価値を高めることができるでしょう。

秋の特別展“飯能の刀匠”

— 小沢正壽を中心として —

■開催日

平成8年10月15日(火)

～11月17日(日迄)

■会場

飯能市郷土館

午前9:00～午後5:00

●開催期間中…

講演会・実演会等
予定しております。

あらまし

山が高くなり、谷は深く、泉は甘さをまして草木が豊きに茂る正丸峠の登り口。大正九年(一九二〇年)五月二五日。小沢正壽は生れた。

昭和八年、家は野鍛冶であったので、鉄鉄や鉄製品の埵、包丁、埵や鍬などの農具類といった、鉄という日常器具製造には、

何でも手をそめたことが、彼の作力感覚を磨くことになる。家業を継ぐために修業、ひと通り刃物の製作を終えた頃に、日本刀の持つ美しさに魅了されてしまった。

周囲の止めるのも聞かず、刀鍛冶を目指して上京、昭和十三年、十七歳で東京麴町大倉喜七郎別邸の日本刀鍛練場に入り、宮原寿広に師事。修業を重ねる。

昭和十六年一月、入宮……。昭和二十年以来、刀剣類は所持、製作を禁止され刀匠受難時代となっていた。「いつの日か刀づくり」を狙い、生活の糧を得るべく、野鍛冶をはじめ、いろいろな職について。

やがて刀剣所持が可能となり、さらに昭和二十七年、講和条約締結の翌年には、日本刀の製作が許可され、その伝統は辛うじて消滅を免れた。鑑賞の対象である美術刀剣のみ作刀が許されたのである。

昭和三十年、自宅で短刀を製作、展示会に出品。

昭和三十三年、三十九歳で東京世田谷鍛練場の鬼才とされた刀匠塚本起正に師事。作刀の精髓を学ぶと、地元から後援会の人達の励みが届いたという。

昭和三十五年、第六回新作名刀展努力賞に輝く。鎔造、庵棟の刀は、板目肌に互の自がかり、映りのような刀文の輝きもみられるなど、作者も久しぶりに心を洗われる思いだったという。ただ、この刀は塚本鍛練所で作品であったので、起正氏死去によりその場が解散するに当たって帰郷。以後鍛刀はひかえた。

刀匠 小沢正壽を偲ぶ

岡野達雄

続く代になって、青江風の逆丁子や直刀、次の代には相州伝風の沸えたものを作刀。

昭和五十三年(一九七八年)

「徳正志」で高松宮賞を受けた。戦後の啓蒙が実を結び、刀に美的側面をみる多くの愛好者が生れている時期であった。

息子

寿久氏のこと

刀を叩く男が、刀を直として通ずる、華やかなものが出て来た。近ごろやたらと逞しい顔つきになって来た。顔色がいい、むくむくした人柄、体軀など、どれ一つを取っても父親に遅れをとらない。

打ち出す作品は、自分の感受性を出いかんとも表現しているようだ。正丸あたりで、毎日炎に巻き込まれていてもらえば、飯能市だったて安泰だ。

山が御神体の金鑽神社

郷土史研・秋の歴史散歩

吉田 靖

平成七年をしめくくる飯能郷土史研究会の秋の歴史散歩は十一月八日、県北西部の寄居町「少林寺」と神川町の金鑽（かなざな）神社など、昔人の信仰と歴史の足跡を散策した。参加者は二十五人。解説は寺社建造物や仏像に造詣の深い井上峰次会長と坂口、岡野両副会長。地質や岩石については地質学の金子仙太郎氏があった。

少林寺は武蔵五百羅漢寺として、また千体荒神板碑で広く知られ、一方の金鑽神社は本殿の無い背景の山全体が御神体という全体的にも珍しい神社である。

今回はこのうち難解な社名を持つ、武蔵七党の児玉党、丹党に深いゆかりの金鑽神社について記してみた。

「金鑽」とはなんと難解な

「武蔵二宮金鑽神社」は児玉郡神川町（合併前は金鑽村）大字二の宮にある。地名「二の宮」が「武蔵二宮」の語源だろうと思っていたが、同社の金鑽和夫宮司によると、「一宮・大宮永川神社に次ぐ社という意味」とのこと。そして終戦までは官幣中社だったという。なるほど鬱蒼たる木立に囲まれた格式を誇るにふさわしいたずまいである。

いつごろの創建かは詳らかではなく、伝説に頼るしかない。同社に伝わる江戸期の卷子本『鎮座之由来記』には、「景行

天皇四十一年、日本武尊東征のみぎり、倭姫命（やまとひめのみこと）より賜った着火の道具、火鍬金と火打石とを御霊代として納め、天照大神とともに祀つたことあり、そうした伝説からみても古い歴史の神社であることは間違いない。

神社といつても冒頭で触れたように、本殿はなく拝殿のみ。いわゆる付近の自然林そのものが神、神体山なのである。したがって人々は拝殿を通して山々に頭をたれるのである。こうした原始信仰の名残りをとどめられた神体山神社は今では全国的にも少なく、珍しい。

「神体山神社」として特に知られる社といえは、まず日本最初

の神社といわれる万葉の古里、奈良長岑井市の大神社だろう。次が長野県の諏訪大社をあげる事ができる。井上会長の説明である。

さて、神社名の「金鑽」だが、なかなか「かなざな」とは読めない。

物知りとして会員から深く畏敬されている井上会長が境内を散策中、筆者に神社名の由来について質問された。が、筆者ごとき浅学非才に知る術もなく、やむを得ず「ぶしつけながら……」と恐る恐る金鑽和夫宮司に直に「ご質問申し上げます。

「そーなんですよ。みなさん何んて読むのかわからないし、振り仮名で読んでみても、得心がいかないようですよ。語源については金砂（かなすな）とか砂鉄の塊（かなさなき）の転の考え方が有力です。どちらにせよ鉱業に関連する社名と思われます。事実 nearbyには金屋、阿那志といった鉄に関連する地名が数多く残っています。」

謹厳実直を絵にしたようなお方だが、お話を聞くに案に相違気さぐりに説明された。

『新編武蔵風土記稿』には「永禄十二年の年号歸りに武蔵六宮の図所載」と記されている。その武蔵六宮は武蔵総社大國魂神社（東京府中市）を主神とする神座の順序を意味するものとみられており、①小野神社

- ②小川神社
 - ③水川神社
 - ④秩父神社
 - ⑤金鑽神社
 - ⑥杉山神社
- の社名が記述されている。

武蔵武士「児玉党」「丹党」の守り神

金鑽神社の格式は参道の入り口の大きな鳥居が物語っている。鳥居を見上げながら手入れの行き届いた参道を行くと、まず最初にりつばな、「多宝塔」が山腹にそびえている。

「みなさんご覧のように、なかなかすばらしい建物です。この建築様式からみて十六世紀初頭の建築で、当然ながら国の重要文化財に指定されています。」

井上会長。

塔の高さは十八メートル。その真柱には「天文三年八月晦日大檀那安保彈正全隆」の墨書がある。安保、あほ、弾正こそ武蔵七党の一、丹党の安保氏なのである。「丹党」といえば丹党中山氏、加治氏など飯能ゆかりの武蔵武士。郷土史研会員のみなさんにとっては馴染みの名だが、ここにては馴染みの名ではなく、この名で丹党の名を聞くとは筆者、当初予想だにしていなかったのである。

そしてもう一つ、武蔵七党「児玉党」の歴史の足跡も同社とその周辺に残されている。たとえば古文書や丸郷用水など平安末期の児玉党の足跡がいたるところにある。

句碑群と鏡岩と

武蔵武士二氏が同社を守り本尊としてきたことがうかがえる。

裏山道を登ると、道に沿って句碑が並んでいる。句碑は、県北俳人たちの最傑作で、石の形もさまざまなら、揮毫も各人の筆になるものと見え、実にさまざま。先に見聞した少林寺の五百羅漢が句碑に重なって見えたのもおかしくなかった。

句碑といふのが一般に読みづらいが、この場合、半分は読ばやすい文体。判読しつづ登れば疲れも感じず登れるという趣向らしい。句碑群が過ぎると、国指定の特別天然記念物「鏡岩」がある。幅は十メートルもあるうか、高さは四メートルほど。金子さんの出番である。

「鏡岩」は飯能の天覧山にもあるが、これも天覧山と同じ約九千年前、関東平野と岡東山地の境にある八王子構造線が生み成されたときの断層の一つと思われる。岩が鏡のように光っているのは断層が露れて光の強い摩擦力により出来たもので人の姿まで写るところから鏡岩と言われています。

そして、汗して登ったところが広く、関東平野を望む山頂。

山頂には「つわものども夢のあと」も

山頂には江戸期の石仏群「御

獄山八十八番」がある。西国八十八番観音札所にちなんでのものである。

その先には弁慶伝説の「弁慶岩穴」がある。だがが言った。「すばらしい見晴しだ。こんなところにお城でも建てれば不落だったろうに……」

そう、実はここ御獄山山頂は丹安安保氏の城「御獄城」のあったところだそう。

文明十二年（一四八〇年）に安保吉兼が築城としたとの伝承があるらしい。が、別説もあり、かくたる根拠を得ないと神川町教育委員会がいま調査を進めているという。

おわりに……

いずれにしても今回の歴史散歩と信仰の歴史を知るうえで、大変な勉強になったが、郷土史研のこうした集いに参加するたびに、會員に博学の士が多いことに感服させられる。

同時に行く先々の市町村郷土史家とか教委担当者との連携を図るなら、歴史散歩の意味は一段と深く大きなものになるのではないかと、思ったりしたものである。（ただし、それには会費との関係も出よすが）

— 乱文多謝 —



に掛けられている。一見の価値あり。茶室もあり、定期的に茶会が開催されている。

▼特別展

『出土品展・狭山の縄文時代』

中央に縦穴住居の実寸カット模型が展示され、住居内の生活が伺われる。その周囲に年代別に出土品を展示。時代印象を深めるために他国の時代と比較する。中国の殷・周、オリエントのベルシヤ・帝国、ヨーロッパのギリシャ・ローマ共和国が略、同時代である。

文化や生活様式の違いがイメージされる。狭山・入間、飯能、所謂入間川沿いの台地が当時は恵まれた自然環境で、縄文人が生活を営んでいた。当然、遺蹟・出土品も多い。

私的に興味を持つたのは土器の模様のみと図形である。隆線文・爪形文・捺糸文等、十指を超える。模様だけを調査してもおもしろいと思う。弥生時代は模様が始と無くなる。余談になるが、模様が無くなつたのは土器づくりの技術向上にある。縄文期の模様を付けた目的は割れ止め、即ちがヌ抜きのためと云う説がある。当時の人がそうだと考えていたかどうかは定かではない。余談ついでに……

折しも四月二十七日に発表された大阪の池上曾根遺蹟（弥生

中期）は耶馬台論争にも影響しそうである。そして四月二十九日の我が郷土史研の例会で柳戸氏の飯能落合・遺跡の発掘の講演を聞き、いやがうえにも縄文、弥生へと夢が広がっていく。



入間市博物館

入間市博物館

オープンは二年前。建物の外観は四角でオリエント調。色は茶と白。敷地は広大でイベント広場、茶室、レストラン等が点在する。

館内は子供科学室、自然・歴史・茶の世界、視聴覚室、特別展示室等が配置されている。浅見学芸員の配慮でゆつくりと見学する。ホールを階段を上がり科学室へ。しばし童心に戻る。アケボノゾウの足跡の標本を観る。ゾウの散歩風景が眼に浮かぶ。マルチビジョンで村山党の一族金子十郎家忠物語を視る。

遺物では国分寺の瓦が目を引き続いた。続いて一階の茶の歴史コーナーは世界の飲法、生活に密着した喫茶慣習等が紹介されている。内容は日本有数のものである。ハイビジョンで展示品の復習クイズ（十問）をする。

▼特別展

『日本の近代グラフィック・デザインの夜明』

明治初期に狭山茶が直接輸入され、梱包した茶箱に張られた絵（ラベル）が「蘭学」と呼ばれた。絵の図案は西洋的で色彩も斬新的なものが多く、現在にも通用するデザインである。このラベルを制作した集団は、江戸以来の伝統を継承する木版印刷技術者（職人）であった。実演コーナーでラベル制作に近似する手法の「浮世絵制作実演」があった。

東京・目白のアゲチ版研の職人の高度な技術を見る。数種の色をムラやズレのない均一に重ねるには熟練と根気を要す。因みにズレは十分の一ミリ迄は手感で調整される。和紙は越前が最上。版木は桜で両面を使う。百枚（一色）刷ると紙を休ませる。版木の寿命は二十枚で削り直し繰り返す……等々。直録の終りにあたり、例会の下準備を終れた役員の方、丁寧に説明案内をされた下さつた、吉



隨筆

御獄神社の秋祭りの

田嶋和子

古くから産土神として信仰が厚いと伝えられている御獄八幡神社の恒例 秋祭りの実施の回覧がまわってきた。通称「本郷のお祭り」である。

住人の関心がある大きな係なく、地元役員の大きな協力によって、このような伝統行事が続けられている。本来は十月十日が本宮になるが、日曜日を利用するため、今年

は十月八日に行われることになった。

この神社の祭神は、誉田別命、大山祇命、大己貴命、で本社が山の中にある。そのことを教わり実際に行ってきたのは、ここに住んで三十年になるが、ずいぶん後になつてからだった。

多峰主山から南へ下る途中の「前若」といふ所に位置し、周辺一帯はごつごつした岩盤が目立つ。足元に氣をとられるが頂上から来るとちよつと一休み、の場所になる。多峰主から吾妻峡方面へ向かうハイカーのほとんどはここを通るはずだから、気付く人は少ないだろう。創建年月ははつ

きりしていないが、相当永い時を重ねたと思われる社である。格子の扉だけがまわりに比べ、古さが新しいのはお賽銭泥桶の仕業で扉が壊されるらしく、たびたび手間を加えるようだ。ここからさらに一段降りた所にその昔、神楽殿があつたという話は神社係をしていたTさんから聞いていた。屏風を広げようには立ちほだかる岩の前のはの暗い広場は、建造物らしき形跡をうつつらと思わせている。神社は祭りが近づくと、新しい年を迎えようとする暮れには自治会役員が掃除をしてくれているのを知った。余分な小枝を切り払い、屋根に積もった枯葉を掃き落として新しいめ縄が飾られる。元日にはお神酒とお供物を供え、大事に守り、護られていたのだろうかの深さを改めて感じた。

だが、今ではここまでわざわざ参拝に訪れる人は稀だといわれている。裾野に見える赤い鳥居をくぐって、そこから登ってかなりの急坂なので、辿り着くまでたやすい道ではないのだ。うっかり足を滑らせたら出っ張

った岩に激突しそうな箇所も覚えていた。南の麓へもう一つ、同じ御獄八幡神社の社があるのはそうした事情からだろうか。大正期に分霊して祀り、お仮り屋として建てたものだとある。大ききも形もほぼ、本社と変らないお仮り屋は、自治会館の東側の石段をいくつか登った木にある。すんなり伸びた杉の木の日に御参りするのとはここである。やはり、氏神さまは足を運びやすい場所が好まれる。祭りの催しは会館の庭で行われ、背宮には奉納ばやしがあり、地元のグループ活動によるテンソ張りのお店が開かれる。焼きソバ、フルーツは子ども達の人気を集めるとか、今年もその予定を回覧で伝えていた。唯一祭りらしさを象徴する底抜け屋台は本祭りの日、祈願祭を済ませてから町内の主な通りを一巡する。幼児には親が付き添って歩き、おび姿の係員が先導で屋台の綱を引いて行く。引き手はまばらだが、ときときよろけそうになる幼児が必死で綱にかじりついて、愛嬌をふり

まく様は、道行人の目を止めている。このような祭りに欠くことのできない協力者は、はやし連のメンバーだ。小・中学生もかけた腕前を発揮するチャンスである。調子にのつた笛太鼓の屋台が表の黒道にさしかかると、力強い太鼓の音が小気味よく胸を突き抜ける。夫婦二人家族では屋台がきたからといって飛び出して見物するのはいが引けるので、私は二階へ駆け上がる。心臓が痺れるようなリズムに浮かれる心を静めて、通り過ぎていく屋台の堤が二階の窓から見送っている。祭り気分が味わう、たつた一分ぐらいの間だが、電車の窓からいい景色が見えたとき、歓声をあげたくなるあの一瞬を想像してもらおう。

祭りへの参加は子育て当時、隣近所連れ立って出掛けて行ったものが、近ごろは行事の知らせが届いて、近所からその話題は聞かなくなつてしまった。祭典に寄せる関心が薄らいでいるのを感じお祭りは、時代なりに脈々と後世へ受け継がれていくことだらう。

田 浅見学芸員に紙面を借りてお礼を申し上げる。

(付記)

※1 所在地 狭山市稲荷山 交通 西武池袋線稲荷交 通 西武池袋線稲荷 徒歩 三分

※2 個人的で恐縮だが昨年、中国・汧羅の屈子祠を訪ねた途上、田園のなかに螺旋状の井戸があり、姑娘が桶に水を汲み肩に担ぐ様子を偶然にも見た。タイムスリップと同時に懸命に生きる姿に感動したことを想起した。

※3 草創期(二万二千年前) 早期、前期、中期、後期、晚期(三千年前)

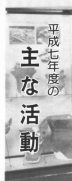
※4 この付近は何故、弥生の遺蹟がないのか。私見も含めて示す。寒冷化、海進海退、食物資源の減少、飲料水不足、生き残るを必要としなかった。

※5 所在地 入間市二本木 交通 西武池袋線入間市駅下車 西武バス、入間市博物館行にて終点で下車

昼食 レストランの定食がお薦め!

※6 飯能市郷土館前館長、浅見氏の御子息。





平成7年度の
主な活動

●四月例会(2回)
野口親音堂と
親音信仰について
講師 野口正元氏

●六月例会(総会・%)
記念講演
「埼玉の惨状」
講師 県立歴史資料館
歴史資料室長
吉田 稔氏

●十一月例会(2回)
郷土はんのう第15号発行
県北西部方面バスツアー
講師 吉田 靖氏

少林寺(五百羅漢・千体荒神
板碑)・桜山公園(鬼石町・
寒桜見学)・金鐘社(鏡岩
・句碑・多宝塔他)・金鐘大
師 参加 二十五名

●十二月例会(2回)
事後学習会 自由討論方式
で行なわれた。

見学会・博物館巡り
狭山市立博物館
入間市博物館

講師 高橋寿夫氏
参加十四名



平成8年度の
活動予定

●四月
飯能の縄文遺跡
講師 柳戸信吾氏

●六月
総会・記念講演
講師 県文化財保護課
埋蔵文化財係長
中島 宏氏

●十月
「縄文時代のあけぼの」
郷土はんのう第16号発行
館林方面バスツアー
◇城下町の歴史と伝統をさ
ぐる

●十二月
事後学習会
◇徳川綱吉・城主の町
◇田山花袋の歩いた町

●二月
阿須方面散策
◇亜炭鉱山見学・歌碑めぐ
り

◇地場産業を歩く
等々、今年度は予定しており
ます。どうぞお友達をお誘いの
上、多数ご参加下さい。

入会のおすすめ

当会では広く会員を募集して
おります。(特に若い方々の入
会を歓迎いたします。)
歴史・民俗等、興味のある方
は、どうぞ、お気軽に事務局ま
でお申し出下さい。
入会はいつでも出来ます。お
友達ともどもご加入下さい。
事務局は、飯能市郷土館内に
あります。☎七二一四一四
金子まで

新しく入会された方々

新井直子(飯能二八〇一八)
西田照子(柳町二六一二)
山崎マサ(仲町一六一一四)
柳沢康雄(浦和市元町
三二一九一七)
滝沢自次(矢嵐一五五)
(敬称略)

黄綬褒章、受賞

おめでとうございませう

昨年の秋の叙勲により、郷土
史研の会長でもあられる井上峰
次氏が黄綬褒章を受賞されまし
た。ほんとうにおめでとうござ
いませう。

これに際し、昨年の十二月十
日に受賞記念パーティが、市内
のホテルで盛大に催されました
今後お休を大切にしますす
のご活躍をお祈りいたします。

飯能市郷土史研究会役員名簿

- ▽顧問
小山誠三・双木利夫・
小谷野寛一・赤田健一
- ▽会長
井上峰次
- ▽副会長
坂口和子・岡野達雄
- ▽監事
中村好男・浅見賢治
- ▽理事
加藤義雄・新井雅子・森田清
次・森田吾助・丸山 清・桑
山和子・椋山治子・関根美智
子
- (二区)
山川玲子
(加治)
杉田多可雄・西野長治・青木
晃平
- (精明)
島田弘一・高瀬恵子・吉田靖
(南高麗)
内野博司
(原市場)
大野邦弘・高橋寿夫・岸道生
・西村一男
(東吾野)
中村源一
(吾野)
浅見徳男・金子仙太郎
- ▽事務局
桑山和子・大野邦弘・岸道生
・内野博司・高瀬恵子・金子
聡子

飯能市郷土館

「秋の特別展」

「飯能の刀匠」

小沢正壽を中心として

■開催日

十月十五日(火)～
十一月十七日(日)

新作名刀展にて高松宮賞を受
賞された、故小沢正壽刀匠の作
品を中心に、日本刀の魅力を分
かりやすく展示、そのほか幕末
から明治にかけての刀匠小林英
道、金工師落合寿親の作品もご
覧いただけます。新しいタイプ
の刀剣展にご期待下さい。



うしろがき……

「期日には必ず」眩入コバヤシ
さんには、今年もまた、なぜか
突き抜けるものがありました。

郷土はんのう 第十六号

発行日 平成八年六月二十三日

発行所 飯能郷土史研究会

飯能市飯能二八一

☎〇四一九七二(四一四)

題 字 小谷野寛 一
表紙写真 柳戸信吾